



④ 前幕

① 鹿頭(獅子頭)
権現頭風で桐の木製。眼と歯には真鍮を張る。シシの精霊を表現したものともしられる。中にはイ草で作ったエジコを付けてかぶり、人頭に紐で固定する。

② 鹿角
基本は日本鹿の角(概ね三又のもの)を使用するが、各踊り組によって角の大きさや枝の出具合等さまざまである。特に立派なものを中立に使用する場合が多い。

③ サイ
馬の尻毛を編んで用いる。サイを左右に振ったり、鹿角にかけたりすることで、踊りの中に美を求めたのではないかともしられている。

④ 前幕(幕垂れ)
麻布でできており、一枚ものではなく二枚(上が陽・下が陰)を独特な縫い付けをし、それを鹿頭に縫い付ける。幕には竹に雀紋・九曜紋・鱗紋等を染めている。喉紋は井桁繫ぎの中に九曜を染めているものが多い。鹿の喉首を表しているともいう。



⑤ 流し

⑤ 流し
頭(天辺)から踵(くろ)まで幅一尺程度のもので、上部に九曜紋を染め、各踊り組によって様々な風流画や和歌を染めている。綿を赤い布で包み棒状にしたものを、華鬘結びをして流しを飾る。

⑥ 華鬘
花の輪をかたちどった飾り物のことで、寺院のお堂の中を飾るもの。
*華鬘結び
ひもの結び方のひとつ。上と左右に輪をつくり、ひもの両端を垂らす。装飾用の結び方。同心結びともいわれる。



⑦ 大口袴(背面)

⑦ 大口袴
袴仕立てではあるが、背面の素材に畳表が使用され、布で覆い牡丹や唐獅子が描かれている。前面には車紋や蝶紋、牡丹などの意匠が描かれる。これら装束の紋図は通常、染色職人によって染められるが、江刺地方では昭和40年頃まで岩谷堂の日本画家、及川豪風(1894-1970)が手掛けることも多かった。毎年、鹿踊りの繁忙期である盆が近づくと、染替えや染め直しの依頼が相次ぎ、豪風はじめ家族総出で染付作業が行われたという。



⑦ 大口袴(前面)
矢紋・車紋・蝶紋・牡丹などが描かれる

◆清衡鹿踊の歩み

平成7年(1995)伊手地ノ神中島清登氏より旧江刺市役所職員による鹿踊同好会を発足、伊手地ノ神より指導を受け、平成8年(1996)に分家の許可を頂戴し、故・及川勉元江刺市長が名付け親となり、奥山行山流清衡鹿踊として活動し現在に至る。

代表者 菊地啓之

江刺区愛宕字前中野

装束は幕垂に仙台伊達家由来の九曜・竹雀紋、そのほか鶴丸・八ツ棹車・不動明王の俱利伽羅剣、鱗紋が付され、腰紋は井桁繫に九曜紋を施す。大口袴は前面に熨斗・牡丹、背面は唐獅子牡丹を染める。流しには行山流山口派の象徴である和歌の大書と俱利伽羅剣を描く。熨斗鮑は進物を図案化したもので、熨斗鮑は進物に添えられ、儀式にも用いられた。また、「のし」という語が「延長」の意味から転じて不老長寿の象徴とされる。八ツ棹車紋は禊が物を「打つ」が「討つ」に通じ尚武の家徴とされ、また、大黒天の持物でもあることから縁起紋とされる。背負網は天色で無紋。シラへ隠しも天色を呈し、井桁繫に九曜紋を染める。



清衡鹿踊の団体旗



前幕には「行山清衡」と鶴丸紋



袴には牡丹紋

中立の装束



「奥濃信天牡鹿酒牡鹿乃里 聲遠楚呂瀧天阿會婦志加可毛」

▼主な演目

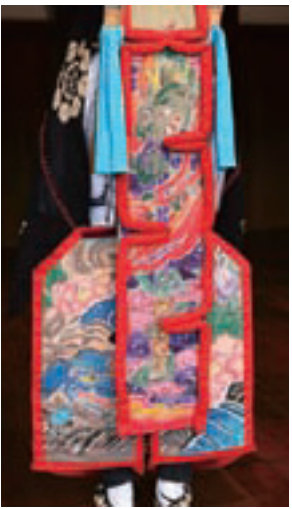
礼庭

▼定期活動等

- 5月4日 江刺甚句まつり
- 8月16日 江刺夏まつり
- 〈その他〉
- 年2回 えさし藤原の郷定期公演等



中立と女鹿の流し



側鹿の流し「俱利伽羅剣」